

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 3 日現在

機関番号：15501
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2020
課題番号：17K13561
研究課題名（和文）後期ローマ帝国時代における世界認識の構造にかんする研究

研究課題名（英文）Structure of World-views in the Later Roman Empire

研究代表者

南雲 泰輔 (NAGUMO, Taisuke)

山口大学・人文学部・准教授

研究者番号：70735901

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、後期ローマ帝国時代において認識され、史資料のなかに表現された世界認識の構造の解明を目的とするものである。4年間の研究期間においては、（1）時代理解の前提となる時代背景の研究動向（「ローマ化」論、「古代末期」論）にかんする研究、（2）『ポイティンガー図』のなかに表現された「世界」の「複層性」と「統合性」について、『アントニヌス旅程表』の内容との比較分析を軸とした研究、（3）世界認識形成の基礎としてのインフラ（街道、城壁、水道）にかんする研究を、それぞれ行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、『ポイティンガー図』を、従来一般に説かれていたような孤立した図像資料としてではなく、古代ギリシア・ヘレニズム時代に形成された地理学・地誌学の伝統に連なるものとして位置付ける視点を獲得できたことが最大の成果であった。ただし、このことは同時に、『ポイティンガー図』の謎を一層深める結果ともなった。すなわち、従来の学説では、一般的に古代ギリシア・ヘレニズム時代の地理学・地誌学と、ローマ時代の地理学とは対立的に捉えられることが多く、両者の連関如何について不明な部分が少なくなかったからである。この点にかんする研究が次なる課題である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research project is to analyze how the structure of Roman world-views described / depicted in various sources in the Later Roman Empire was constructed. The main source is the Tabula Peutingeriana, the so-called Peutinger Map. This research provides some new perspectives to the Roman characteristics of the geographical / chorographical tradition from the Greek and Hellenistic geography found in this enigmatic 'map'.

研究分野：西洋古代史

キーワード：後期ローマ帝国 ポイティンガー図 アントニヌス旅程表 地理的認識 世界観

1. 研究開始当初の背景

ローマ人は、ローマ街道と公的伝達システム (cursus publicus) の利用に際して、旅程表 (itinerarium) と呼ばれる経路案内を帝国各地で作成したが、帝政後期にはそれらを総合した全帝国規模の旅程表が編纂されるにいたった。3 世紀末から 4 世紀初頭に成立したとされる『アントニヌス旅程表 (Itineraria Antonini)』がその代表的な事例である。

かかる旅程表は、C.R. ホイタッカーの研究によって、ローマ人の空間把握が、線的な連なりに基礎を置くものであったことを示す根拠として理解された。ホイタッカーの言葉を敷衍すれば、ローマ人の世界認識はローマ街道網に基づいて形成されていることになる。つまり、ローマ人の世界認識を解く鍵は、彼らの街道網の理解の仕方如何にあると考えることができる。

ローマ人の世界認識形成の軸となるローマ街道網について、その路線図を視覚的に表現したものとして一般に理解されているのが、『ポイティンガー図 (Tabula Peutingeriana, Codex Vindobonensis 324)』の名で知られる図像資料である。この資料は、1200 年頃の制作と推定され、全体では縦幅約 34 cm × 横幅約 675 cm におよぶ長大な巻物状の彩色写本で、現存する獣皮紙 11 枚分がオーストリア国立図書館に所蔵されている。原本 (現存せず) は後期ローマ帝国時代 (4 世紀半ば) の成立と考えられており、当該時代の街道網のあり方とそれに立脚する世界認識を考究するに際して第一級の重要性を持つ図像資料である。

しかし、B. サルウェイが、『ポイティンガー図』は「謎に満ちた資料で、ほとんどすべての側面が論争的であり続けている」と述べているように、制作時期や制作意図など資料解釈上の基本的問題の多くが未解決のままの、問題の多い資料でもある。近年、『ポイティンガー図』研究の第一人者である R. タルバートや E. アルブラによって、『ポイティンガー図』原本の成立時期や現存写本そのものについて新しい見解が次々に主張されており、「ローマ街道の路線図」という通説的理解も見直しを強く迫られているが、現状では諸説併存状態にあり、統一的理解が形成されるにはいたっていない。

2. 研究の目的

本研究は、後期ローマ帝国時代において認識され、史資料のなかに表現された世界認識の構造の解明を目的とする。後期ローマ帝国時代は、帝国の政治的崩壊・解体期であるが、他方で帝国内外の領域や道路網の状況を総合的・俯瞰的に把握しようとする多様な史資料群が生成した時代でもあった。それらは単に帝政後期の現実を反映するばかりでなく、これに先立つ時代に形成された世界認識を継承した結果、同時代の状況からの乖離や錯誤をも内在させている。本研究では、図像資料『ポイティンガー図』を中心とし、後期ローマ帝国時代の関連史資料を比較対照することで、そこに表現された「世界」の「複層性」と「統合性」について考察する。

3. 研究の方法

(1) 史資料および先行研究の収集と検討

後期ローマ帝国時代の世界認識に関連する史資料を、可能な限り網羅的・体系的に収集し分析するよう努めた。

研究の初年度である 2017 年度は、2017 年 9 月に英国・ロンドン大学古典学研究所、および、英国図書館において集中的な資料調査を実施した。これによって、ポイティンガー図にかんする近年の研究動向について改めて詳細に整理・検討を行なうとともに、これまでに得ていた認識を再確認し、部分的に修正することができた。

2 年目の 2018 年度は、2018 年 8 月に、本研究課題における最重要資料である『ポイティンガー図』を所蔵するオーストリア共和国・オーストリア国立図書館、および、同国の関連博物館・美術館において、後期ローマ帝国時代の世界認識に関連する史資料、とりわけ『ポイティンガー図』に関連する史資料に重点をおいて調査を実施し、多大な収穫があった。特に、この資料調査の結果、『ポイティンガー図』と『アントニヌス旅程表』との比較研究にかんする進捗の現状を確認し、これによって前年度までの分析結果を補うことができたのは大きな成果であった。

3 年目の 2019 年度は、これまでに収集した史資料の整理を行なうとともに、近年の重要な研究文献を複数選定して、研究課題を多面的に考察することを試みた。

最終年度である 2020 年度は、新型コロナウイルス感染症の世界的拡大の影響により、所属研究機関から海外渡航の禁止が通達され、今後の感染状況改善の見通しも不透明となったため、当初計画で予定していた海外資料調査は中止し、これまでに収集済みの史資料および 2020 年度に新規購入した史資料に基づき研究を進め、先行研究の摂取と認識の深化に努めた。

(2) ポイティンガー図の分析

4年間を通じて、本研究の考察の中心である『ポイティンガー図』について、学説史の現状にかんする整理検討を行なったうえで、当該図像資料それ自体にかんする研究を実施するとともに、同時代の関連史資料との比較分析作業を行なった。特に、継続的な先行研究の収集と分析を通じて、『ポイティンガー図』における情報継受の関係を問題の焦点として設定するとともに、『アントニヌス旅程表』の内容との比較を中心に、『ポイティンガー図』のなかに表現された「世界」の「複層性」と「統合性」を中軸として研究を進めた。

4. 研究成果

本研究課題において得られた主要な研究成果とその意義、今後の課題は、それぞれ以下の通りである。

(1) 時代背景の研究動向（「ローマ化」論、「古代末期」論）にかんする研究

本研究課題の対象とする時代全体の理解については、近年、国内外における学界の動向が大きく変化しており、その方向性を正確に把握することは、本研究遂行上、時代理解の前提として必須の重要性を持つ。この点に関連して、以下の成果を上げることができた。

「古代末期」論の理解にかんする近時の学界動向について、時代区分論の観点から行なった考察を国内・国外の学会において口頭で報告し、これをもとにした論文1篇を発表した。また、その要点をまとめた簡潔な解説記事を、分担執筆の図書に発表した。

「古代末期」論に対する批判として重要な文献の日本語訳(単独訳)の新装版が刊行された(初版:2014年)。

ローマ帝国の支配・被支配にかんする議論(「ローマ化」論)の相対化を促す英語文献の書評1篇、ローマ帝国史、および、「古代末期」史に関連する日本語文献の書評2篇を、それぞれ発表した。

西洋古代史研究の碩学アルナルド・モミリアーノの文献(日本語訳)について、歴史学研究者の営為への着眼から、文献紹介を分担執筆の図書に発表した。

以上の成果によって、本研究課題にかかわる時代背景について有益な知見を得ることができたばかりでなく、「古代末期」論および「ローマ化」論の現状と課題について、国内学界に対し情報提供と問題提起を行ない、研究状況の理解促進という点で重要な貢献を行なうことができたと考えている。学界動向は不断に変化するものであるため、今後も引き続き注視を継続していくことが必要である。

(2) 『ポイティンガー図』にかんする研究

本研究課題において主要な分析対象とする『ポイティンガー図』について、以下の成果を上げることができた。

収集した史資料を用いて、『ポイティンガー図』にかんする近年の研究動向を改めて詳細に分析し、その成果を国内学会において口頭で報告した。

先行研究において『ポイティンガー図』との関連が想定されている後期ローマ帝国時代の公的伝達システムを扱った最新の研究文献の書評1篇を発表した。

西洋古代世界における地理的認識・世界観について、『ポイティンガー図』にかんする指導的研究者の一人である R. タルバートによる地理的携帯型日時計に着眼し考察した重要な研究文献の書評1篇を発表した。

『ポイティンガー図』と『アントニヌス旅程表』の比較研究の成果を、国内学会において口頭で報告した。

以上の成果によって、『ポイティンガー図』にかんする学説史の現状と課題、資料的意義と重要性、「世界」の「複層性」と「統合性」のそれぞれについて、重要な知見を得ることができた。とりわけ、ローマ帝国時代におけるヘレニズム地理学の受容のあり方、および、「古代末期」における地図学的思考(cartographical thinking)の重層的な性格について、M. ラートマンや S.F. ジョンソンらによる先行研究の摂取を通じて認識を深めることができた。これによって、『ポイティンガー図』を、従来一般に考えられてきたように唯一無二の孤立した図像資料としてではなく、同時代史的な文脈のなかに適切に位置づけるための視点を獲得できたことは大きな成果であった。しかしながら、このことは、『ポイティンガー図』の謎を一層深める結果ともなった。すなわち、従来の学説では、一般的に古代ギリシア・ヘレニズム時代の地理学・地誌学と、ローマ時代の地理学とは対立的に捉えられることが多く、両者の関連について不明な部分が少なくなかったからである。それゆえ、今後は、ローマ帝国時代における世界認識の形成過程について、ローマ帝政後期から帝政前期へと時代を遡及し、ギリシア・ヘレニズム地理学・地誌学とローマ地理学の影響関係如何の問題へと研究を進めてゆく予定である。

(3) 世界認識形成の基礎としてのインフラにかんする研究

本研究課題は、西洋古代世界における世界認識の形成と街道・城壁・水道などインフラとの関連を念頭に置いている。この点に関連して、以下の成果を上げることができた。

ローマ帝国東部の「首都」コンスタンティノーブルの都市的發展と給水インフラとしての水道の整備の関連を論じた論文1篇を、分担執筆の図書に発表した。また、これに関連して、コンスタンティノーブルにおける水利用の実態について、国内学会のシンポジウムにおいて口頭で報告し、これをもとにした論文1篇を発表した。

ローマ帝国西部の「首都」ローマのインフラである街道・城壁・墓地について、感情史の観点を交えつつ考察した論文1篇を、分担執筆の図書に発表した。

都市オスティア・アンティカに関連する最新の日本語研究文献の書評1篇を発表した。

以上の成果によって、ローマ帝国東部の「首都」コンスタンティノーブルにおける給水システムとして重要なヴァレンス水道や、ローマ帝国西部の「首都」ローマを取り囲むアウレリアヌス城壁やローマから発する幹線道路のひとつアッピア街道といった具体的な対象に即しつつ論じることで、当初計画で想定していた以上の視野の広がりを得ることができたばかりでなく、インフラに着眼した研究の可能性を提示できたと考えている。今後は、世界認識形成との連関をより具体的に解明してゆくことが課題となるであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 南雲泰輔	4. 巻 58
2. 論文標題 後期ローマ帝国時代のコンスタンティノープルにおける水の利用とその制限（特集「ヨーロッパ史における水の資源化とその管理・統制」）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 西洋史学論集	6. 最初と最後の頁 50, 55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南雲泰輔	4. 巻 58
2. 論文標題 （書評）小林功著『生まれくる文明と対峙すること：7世紀地中海世界の新たな歴史像』（ミネルヴァ書房、2020年）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 西洋史学論集	6. 最初と最後の頁 66, 69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南雲泰輔	4. 巻 19
2. 論文標題 （書評）Richard Talbert, Roman Portable Sundials: The Empire in Your Hand, Oxford, 2017.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 西洋古代史研究	6. 最初と最後の頁 51, 60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 南雲泰輔	4. 巻 1149
2. 論文標題 西洋古代史の時代区分と「古代末期」概念の新展開	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 思想（2020年1月号「時代区分論」）	6. 最初と最後の頁 15, 35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南雲泰輔	4. 巻 68
2. 論文標題 (書評) Emma Dench, <i>Empire and Political Cultures in the Roman World</i> , Cambridge, 2018.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 西洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 146, 149
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南雲泰輔	4. 巻 70-2
2. 論文標題 (書評) 坂口明・豊田浩志編『古代ローマの港町 オスティア・アンティカ研究の最前線』(勉誠出版、2017年)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 古代文化	6. 最初と最後の頁 285, 287
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南雲泰輔	4. 巻 263
2. 論文標題 (書評) 井上文則著『軍人皇帝のローマ：変貌する元老院と帝国の衰亡』(講談社選書メチエ、2015年)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 西洋史学	6. 最初と最後の頁 64, 66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南雲泰輔	4. 巻 12
2. 論文標題 (書評) Lukas Lemcke, <i>Imperial Transportation and Communication from the Third to the Late Fourth Century</i> , Bruxelles, 2016.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 異文化研究	6. 最初と最後の頁 91, 98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 南雲泰輔
2. 発表標題 後期ローマ帝国時代のコンスタンティノープルにおける水の利用とその制限（シンポジウム「ヨーロッパ史における水の資源化とその管理・統制」）
3. 学会等名 九州西洋史学会2020年度秋季大会（共催：九州歴史科学研究会）（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 南雲泰輔
2. 発表標題 ポイティンガー図とアントニヌス旅程表：後期ローマ帝国時代における地理的情報の継受の態様
3. 学会等名 第18回古代史研究会大会（於京都大学）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 南雲泰輔
2. 発表標題 Two 'Late Antiquities' since 2015: Reconsidering the Periodization from Antiquity to the Mediaeval Ages
3. 学会等名 International conference "Negotiating the Time"（於大韓民国ソウル市、西江大学校）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 南雲泰輔
2. 発表標題 西洋古代史の時代区分と「古代末期」概念（シンポジウム「西洋史における時代区分」）
3. 学会等名 第85回西洋史読書会大会（於京都大学）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 南雲泰輔
2. 発表標題 後期ローマ帝国時代のメンタル・マップをどう理解するか：ポイティンガー図をめぐる近年の研究動向
3. 学会等名 第16回日本ピザンツ学会大会（於石川県政記念しいのき迎賓館）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 南川高志・井上文則編、阿部拓児・栗原麻子・杉本陽奈子・岸本廣大・藤井崇・酒嶋恭平・西村昌洋・小山田真帆・疋田隆康・山内暁子・桑山由文・増永理考・南雲泰輔・庄子大亮著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 400
3. 書名 生き方と感情の歴史学：古代ギリシア・ローマ世界の深層を求めて	

1. 著者名 金澤周作監修、藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透編、周藤芳幸・竹尾美里・師尾晶子・庄子大亮・佐藤昇・南雲泰輔ほか112名著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 340
3. 書名 論点・西洋史学	

1. 著者名 ブライアン・ワード＝パーキンズ著、南雲泰輔訳	4. 発行年 2020年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 336
3. 書名 ローマ帝国の崩壊 [新装版] : 文明が終わるということ	

1. 著者名 藤原辰史編、中西竜也・小野容照・三俣延子・友松夕香・福元健之・金澤周作・湯澤規子・北村嘉恵・長谷川貴彦・山手昌樹・志村真幸・中野耕太郎・小川佐和子・武井弘一・福家崇洋・駒込武・南雲泰輔・小野寺史郎・坂本優一郎・小山哲・小関隆・岡田暁生著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 272
3. 書名 歴史書の愉悦	

1. 著者名 南川高志編、加納修・佐川英治・南雲泰輔・藤井律之著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 304
3. 書名 378年：失われた古代帝国の秩序（歴史の転換期2）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

南雲泰輔 (researchmap) https://researchmap.jp/tngm/

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------